

卒業にあたって

法学部学生 鶴崎敏博

昨年3月に学部の卒業記念パーティーを企画、実施して先輩を送り出したと思っていたら、何の事はない、自分達が送られる番がもう来てしまった。卒業にあたって別に、万感胸に込み上げるほど、特別な感慨などは持っていないが、やはり、一つの大きな節目であり、社会へ放り出される区切りでもあるので、何かしら思うところはあります。

大学生活4年間、遊んで過ごすにはあまりに短く、まじめに何かをやるには長い期間ではなかったかと思えます。私自身、特別な事をしたわけでなく、気の向くまま、好きな事ばかりやっていました。恥ずかしい話、そこまで真剣に勉強やクラブに打ち込んでみず、そこそこに、そして適当にかわしてきました。でも、それなりに真剣だったとは思いますが。

ただ、オートバイと旅行だけには、力を入れまして、年間の3分の1はオートバイに乗って旅行に出て、広島にはいなかったんじゃないかと思えます。それも確固とした目標があったわけではなく、ボーッとすると、温泉に入るために貧乏旅行の極地をやっていました。北海道でお金が底をついて、蟹工場でバイトしたり、見知らぬ民家に泊めていただいたり、仲間がオートバイに乗ったまま川に落ちたのを見て大笑いしたりなど、気楽な旅の数々でしたが、各地で生きた見聞を広めることができたり、知り合った人の数は手帳2冊分にもなりました。これらの旅に無理に意義などは求めませんが、ほんとうに良い旅をたくさん経験しました。

学部での役員も、サークルも、バイトも、そして就職活動も何かと無難に乗り越えることができました。一生懸命に何か打ち込ん

だ方々に対してはほんとうに尊敬の念を禁じ得ないほど、大した苦勞を知らずに大学生活を過ごしてしまいました。しかし、自分の友人の多くも同じようですので、平均的ではなかったかと思っています。

モラトリアムとか、自己形成の期間とか言われる学生生活に対して、ほんとうに意義は必要としません。しかし、これから訪れる社会人としての生活に対しては、ある程度の決意を持って臨みます。自分に楽しくそして厳しく、社会に責任を持って、貢献し得ようがんばります。さらに、主観、客観の双方を備えた判断能力を身につけようと思えます。

最後に、言いたい事ばかり言って、やりたい事ばかりして、しかも、自分一人の力で達成したような錯覚を持っていましたが、ほんとうにいろいろな人に、時には引き上げてもらい、時には支えてもらいました。先生方、事務関係の方々、そして良きにつけ悪きにつけ私に関わってくれた多くの友人に、広大での4年間を私が誇りに思える事に感謝いたします。

以上、卒業にあたっての感想と決意と謝意でした。

